

大沼法竜著

宗祖七百回忌記念

原稿集

敬行寺發行

原稿集 目次

- 1 利他の信樂(正法獅子吼)……………昭和十年四月……………一
- 2 家庭の聖化(婦人)……………同十一年三月……………一三
- 3 給会所説教(法の園)……………同十一年五月……………一八
- 4 二河譬説教(婦人と修養)……………同十一年六月……………二七
- 5 護らるる力(信の力)……………同十一年六月……………三一
- 6 給会所説教(法味)……………同十一年六月……………三六
- 7 婦人の使命(婦人)……………同十一年六月……………四四
- 8 体験談(誓流)……………同十一年七月……………五〇
- 9 信の光(呼び声)第一輯……………同十一年八月……………六三
- 10 無上の信心(教線)第一編……………同十一年十一月……………八〇
- 11 特別説教……………一九二一……………九一

| | | |
|----|----------------------|----|
| 12 | 信 前 信 後 (世界仏教) | 一六 |
| 13 | 生きた信仰 (呼び声) | 一六 |
| 14 | 不可思議の功德 (呼び声) | 一五 |
| 15 | 不安がやみません | 一四 |
| 16 | 若不生者の誓い | 一五 |

原稿集

大沼法龍

1 利他の信樂 (正法獅子吼)

昭和十年四月

利他の信樂うるひとは 願に相応するゆゑに

教と仏語にしたがへば 外の雜縁さらになし

明治維新の廢仏毀釈の渦中に在りながら、真俗二諦の妙旨を諦得遊ばして数百万の門信徒に範を垂れ、回天維新の外護者となり宗門の基礎を確立して一般布教は勿論、監獄、軍隊、海外の特殊布教にまで全力を注ぎ給ひし名師の三十三回の大法要に遇い

まつり、各自は奮起して何か記念事業を興さなければなりません。

會館を建つる事も、記念樹を植える事も、御仏壇を購う事も、家内中の和合を期する事も記念事業には違ひは有りませんが、永劫不滅の記念事業は仏智の不思議を水際鮮かに諦得せしめられて、感謝法悦の生活をさして戴く事であります。有名な白楽天が烏窠禪師を訪ねられて仏教の要義を問われた時、「諸惡莫作衆善奉行」と答えらるると「その位の事なら三歳の童児も知つて居る」「三歳の童児も之を知れども百歳の翁も之を行う事難し」と仰せられた由、皆様に浄土真宗の要義如何と問えば、信心正因称名報恩と御答えにならない方は有りますまいが、言葉を離れた仏智の不思議に満足し切る方は、至つて稀でありますから念を入れて水際角目をはつきり聞き開かなければなりません。

抑もこの御讚題の御和讚は、善導大師の礼讚の専修の四徳を讀えられたもので、雑修には十三の失を挙げて、雑修を捨て速かに専修に帰せなければならぬとの思召で

あります。その専修、雑修の分岐点は、深心の徹底したかせぬかで決まるのでありますから、利他の信樂を獲得すれば三仏を生かすけれども、不安の機が去らなければ三仏を殺す事になる。生かすも殺すも心一つ、晴れたか晴れないかで水際が決まるのです。往生は一定と云う大満足が出来たか出来ぬかで、八万の法蔵を讀みもすれば反古にもするのでありますから、あなたのお心は如何で御座います。

口では「もろもろの雑行雑修自力の心をふりすて」と捨てた積りで居ますけれども、雑行が何やら、雑修がどんなものやら判らなくて、真似だけして来たのでは切味が有りませんよ。

雑行とは物柄が悪いのでなく、心得が悪いから嫌わるるのです。経には諸々の功德と言ひ、釈には一切の諸行とか、諸善万行とか言つて有りますし、起立塔像、飯食沙門、孝養父母、奉事師長、俗諦行儀、社会事業、公益公德、悉く納まつて居るのですから、身に契う善根なら能う限り実行しなければなりません。すれば雑行と言つて敬

遠して居られますが、実行なさらぬから善果が報うて来ないと同時に、無宗教の者から真宗は墮落した宗教だと批難さるるのです。又実行しなければ人間の道徳が務まりません。而しその実行の功を見て、これだけ行われるから悪い処へ行かないだろうと至心発願する気持を以て修するから、雑行と言つて物柄まで嫌わるるのでありますが、信樂開発以後ならば異類の助業として、名号六字に任運に随伴するのであります。

雑修もその体が悪いのでなく、心得が悪いから捨てねば丸他力にはならないのです。雑修の本義から言えば、

「助正ならべて修するをばすなはち雑修となづけたり」

で、阿弥陀仏一仏に向いた五種の正行ではあるけれども、他力の念仏でない為にあの人よりはと人間に比較してお経も読めるし、心も落ついて居るし、礼拝も出来る。お給仕もお話もさして戴けるから悪い処へ行かないであろう、南無阿弥陀仏、南無阿

弥陀仏と前三後一の助業を以て才四の称名の踏台にして、勤め振りや成り心に執わ
れて居るのを雑修の行者と言うのでありまして、雑修の部類と言えは念仏称えながら
病気の全快を思つたり、幸福を願つたり、出世を望んだりすることや、あの人よりは
私は慎みがよい、施しも出来るし、寄附もさして頂く等々と、念仏しながら少しでも
自惚気の有る方は、悉く雑修の行者と言うのです。修することは結構であり、又修せ
なければならぬ善行ではあります、これだけ修せらるるからと大びらには言わな
くても、独りにんまり自惚れる臭味があるから、至心廻向の機軸が捨られないと言つ
て雑修を嫌わるるのです。然し信楽開発以後ならば、同類の助業として名号六字に任
運に随伴して仏事を莊嚴するのであります。

自力の心とは、私は自力を起しては居ないと言う粗大な自力でなく、お慈悲が聞え
たのならば少しは慶ばれそうなもの、如来の念力が届いたのならば少しは慎めそう
なもの、鞭をあてて居るのは慎めたらこれこれと思ひ、乱れたらこれではと小首を傾

けるのですから、自分の心の善し悪しで往生の定不を決めようとして居ますから、定散自力の心と言うのです。然し信樂開發以後の謹慎努力なれば、之程尊い報謝は有りません。

疑いの心とは、私は疑うては居ませんと言う粗雑な簡単な疑いではありません。本願に向き、お助けに向き、勅命に向き、微塵ばかりでも之れでよかろうかと言う不安の有るのは悉く疑いです。鋭く言えば、信樂開發の分齊をはつきり聞き開くまではいくら有難がつても、これも御報謝御報謝と飾つて居ても疑いの芽をふいて居ないのであつて、根は絶えて居ないのでから平生は冬籠りして居ても、臨終の陽気に逢えば必ず黒雲を巻き起します。何故かと言えば諸善万行を修して居る人も、名号六字の超勝を知る人も、唯除逆誘の信機が徹底して居ない人ですから、若不生者の信法は徹底して居ないから自惚れるのです。自惚れるから本願を如実に聞いて居ません。聞いて居ませんから晴れて居ません、晴れて居ませんから疑うて居るのです。

皆様、雑行雑修自力の心と言いましても、物柄から言えば諸善万行、五正行、奮
発心であります、之を振捨てたら一体何が残るのです。疑い一杯、不安一杯、煩惱
一杯が残りはしませんか。それに仏智が満入した時が晴れて明るうなるから、明信仏
智とも信樂開發とも不断煩惱得涅槃とも言うのではありませんか。だから闇のない人
には明りはなく、疑いのない人には晴れた境地は味えないのです。
「設満世界火必過要聞法会当成仏道広済生死流」とか「設有大火充滿三千大千世界要
當過此聞是經法」とか「おのおの十餘箇国の境を越えて身命を顧みずして」とか「今
度の一大事の後生」とか仰せられてありますが、伊達に並べられた文句ではありませ
んよ。一日位十日位寢食を忘れて求道した事が有りますか。自分は素直な柄と自惚れ
て居ましても、三千世界を探しても素直な人間は一人も居ませんよ。お聖教を読ん
で有難い真似をし、お説教を聴いて戴いた振をして居るのであつて、心の底はびくと
も動いては居ないではありませんか。